

反応機会場と連続子—文のなかの行為連鎖—

西 阪 仰

責了0. はじめに

本報告では、日本語の会話において体系的に観察されるオブジェクトに焦点を当て、そのオブジェクトが会話のなかで会話者たちによりどう用いられ、あるいはどう志向されるかについて、気づくことを述べていきたい。林誠は、最近「文のなかの談話」という現象に注目している (Hayashi, 2004; 林, 2005)。言語学の伝統において、談話 (discourse) は文 (sentence) の集まりと通常考えられている。しかし、林の集めた会話データにおいて、文のなかに、複数の会話者の発話が埋め込まれるような事例が、いくつかあった。例えば、#1では、「もし六時半にたどりついてなかったら」という1つの文 (の一部) のなかに「六時半やったかな:」「う:ん」というやりとりが、すなわち確認を求め、それに応えて確認を与えるというやりとりが埋め込まれている。

#1 [Hayashi, 2004, p. 345]

- 01 まさき: そやから: あ:の:::う:: もし-(.)
02 六時半やったかな:,
03 ひろむ: う:ん.
04 まさき: →に: たどりついてなかったら:,

この事例は、まぎれもなく「複数の発話順番にまたがる文構築」(西阪, 2005c) の事例であるし、あるいは「文のなかの行為連鎖」の事例で

ある。

「文のなかの行為連鎖」は、英語の会話においても生じうる。例えば、Gene Lerner (2004) は、1つの、いわゆる「前置詞」(Lerner 自身は、会話における発言の組織という点に注目することで、「付足し誘出子」という言い方をしている) が1つの発言順番全体を構成するような事例を集めている。#2はそのような例の1つである。

#2 [Lerner, 2004, p. 162]

- 01 Jack: I just returned
02 Kathy: →**from**
03 Jack: Finland

Jack の01行目の順番は1つの順番として完結している。Kathy の02行目の「from」は、そのいったん完結した相手の発話順番に対する「付足し」を求めている。03行目でJackはその求めに応え、「付足し」の情報を与えている。「I just returned from Finland」という1つの文のなかに行為連鎖が埋め込まれている。

林とLernerは、それぞれ本来発話の出だしには用いられない語句が発話の冒頭に用いられること (#1の04行目)、あるいはそもそも独立性のきわめて弱い語句が単独で1つの発話順番を構成していること (#2の02行目) に注目している。その発話順番は、いわば直前の発話

(もしくはやりとり)に「寄生的」に構成されているわけだ。

林の例(#1)が照準しているのは、順番3のデザインであり、Lernerが照準しているのは順番2のデザインだった。本報告が照準しようとしているのは、むしろ順番1における、文の前半部分である。そこに、「文のなかの行為連鎖」の開始を体系的に許す場所が用意されている。以下では、このような場所の形式的特徴と機能について大雑把な見通しを得たあと、そこで行為連鎖がどう開始されるかを概観する。そのあと、中断された文がどのように再開されるかを検討したい。この小論においては、私が「反応機会場」と呼ぶ会話オブジェクトと、「連続子」(西阪, 2005b)と呼ぶべきアイテムについて報告する。

1. 反応機会場

日本語の会話において文もしくは順番が完結するまえに、しばしば、聞き手が反応するのが観察できる。例えば、次の#3のように。Bは、もともと約束していた待合せの場所を秋葉原に変えてほしいと、Aに提案していた。Aがその提案を受け入れたあと、Bは待合せ時間の確認へと進んでいく。

#3 [TB 04]

01 B: じゃあ今度 何時:。
02 (0.8)
03 A: 'ん じゃあ十二時.=
04 B: =十二時で。
05 A: あん。
06 B: 十二時でアキバの <どこ> だ:。
07 (2.0)
08 A: →てゆうかさ:。
09 B: →うん
10 A: 別に途中で待合せしてもいいんじゃない
11 B: [あま]あ
12 もちろん:。

06行目でBが、実際に落ち合う場所の取決めを開始する。そのあと、2.0秒の間合があり、Aは「てゆうかさ:」と応じる。「てゆうかさ:」は、文として完結していないだけでなく、発言順番としても完結していない(#2の02行目の「from」のように文として完結していなくても発言順番として完結している場合はたくさんある)。しかし、09行目でBは「うん」と反応している。

次の#4も同様である。#4は、電話口にAが呼び出されて出てきたところから始まっている。かけ手のBは、Aにゼミの宿題のことで質問するために電話をしてきた。

#4 [MI #8]

01 A: もしもし:[?:?
02 B: [もしもし:[?: みきこですけど:。
03 A: [ん::ん。
04 A: はい は:[い。
05 B: → [.hh あのさ:::[:::
06 A: → [はい。
07 B: トランスプ-クリプトって >ほんとか
08 三十秒でいいの:?
09 (0.6)
10 A: え? ちがう[の:?
11 B: → [.hh てゆうか:::<
12 A: →ん:[:。
13 B: [やった:?
14 (.)
15 A: やった やった::。

互いに誰であるかを認識するためのやりとり(02-04行目)のあと、かけ手(B)は、「あのさ::」と言って、電話の用件に入っていく(05行目)。「あのさ::」も、これだけでは、文としても、発言順番としても完結していない。しかし、やはり、そのあとAは「はい」と反応している。11行目の「てゆうか::」も発言順番としては完結していないにもかかわらず、そのあと(06行目)、聞き手は反応している。

一方、「てゆうかさ:」(#3)や「あのさ:」
「てゆうかさ:」(#4)のあとで、何らかの反応
を行なうことは、自然でもある。このように、
発言順番として完結していないにもかかわらず、
聞き手が反応してもよい場所が用意されている。
このような場所のことを「反応機会場」と呼ぶ
ことにしよう。

形式的特徴

反応機会場にはいくつか形式的特徴が考えら
れる。もちろん以下のすべてを同時に満たして
いる必要はない。また以下の特徴が、反応機会
場の形式的特徴のすべてであるわけでもない。

- ・ 単語の語尾にある（単語の途中にない）。
- ・ 語尾が延ばされることがある。
- ・ 「区切り」をマークする標識（「さ」「ね」な
ど、一般的に「終助詞」と呼ばれるものだけ
ではなく、「けど」など「接続助詞」と呼ば
れるもの、あるいは「は」「が」など「格助
詞」と呼ばれるものも含む）を語尾に伴うこ
とがある。
- ・ 最後の音に強意がつくことで音調が少し上
がることある。その直後に少しだけ下がるこ
ともある（発言順番の完結点をマークするよ
うには下らない）。
- ・ 語尾の延ばされた音の最後に強意がつくこ
とで音調が少し上がることある（質問を構成
する発話の末尾のようには上がらない）。

次のような例もある。これは男性3人の会話
である。Cは、Bに、Bの家の近くにある「麵
屋土蔵」というラーメン屋に、実際に行ったか
どうか聞いている(01行目)。Bは、麵屋土蔵
に行くにいたるまでのことを、「明治軒」とい
う別のラーメン屋に言及しながら語り始める。

#5 [KB-3 12-13]

01 C: d- で なになにに麵屋土蔵の話は、

02 B: =あ, s:- 麵屋土蔵行ったんすよ:[:
03 C: [あ
04 はいはい。
05 B: あの:: いや: ぼくは: ↑明治軒:: の
06 ほうに け- 二回か三回か ぐらい
07 振られてて::
08 C: °はい°
09 B: あの:: ま さ- 三時前に行きやあもう
10 すぐh-ひと いなくなるかな:: と思っ
11 行ったら[::]
12 C: [ん] 今度はもう e-閉まっちゃ
13 うだろう?=
14 B: =閉まっちゃうんですよ:. んで .h なん
15 ぼく こないだ友だちが: 来たんで:: で
16 あのタクシーで: >わざわざ< 行っ
17 んですよ:.
18 C: タ(h)クシ[ーで
19 A: [麵屋土蔵ってどこにあるの。
20 B: 麵屋土蔵って あの 西口に:: あの
21 →((大学名)) のところにあるんですけども::
22 A: →ん:ん
23 B: あれは (こう) 明治軒のもうちょ- 直営-
24 ちょ-ちょ- [直系[みたいな[もんで:]
25 C: [ん::[ん: [(直系)]で=
26 A: あそうなんだ。

19行目でAが麵屋土蔵の場所を聞いている。
それに対して、最寄駅の「西口」の、某大学の
そばにあると、Bは答えている(20-21行目)。
21行目の末尾は、「けども」という区切り子を
伴い、最後の音（「も」もしくは「o」）に強
意が置かれ、その音が引き伸ばされ音調が少
し下がっている。実際の音をそのまま聞くと、
発言順番はここで終わらずさらに続くこと、
このこと的主張が含まれているように聞こえる。
しかし、一方、なんらかの区切りがつけられ
ているようにも聞こえる。このようにして作
られる場所が、ここで「反応機会場」と呼ぶ
ものにはほかならない。そしてそのあと、A
は「ん:ん」と反応している。

場所というオブジェクト

反応機会場は、このような際立った（有標的な）場所である。このような場所が用意されていることは、あたかも、日本語の会話には、「（発言） 順番を構成する単位」（Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974）よりも小さい単位があるかのようにも思える。例えば、森田笑は、このような場所に注目しながら、順番構成単位の低位に「相互行為に関連した単位」があることを主張している（Morita, 2005）。森田は、焦点を「発話者の」発話産出過程から相互行為上の働きへと移動するため、このような命名を行なった。私自身も、それが何らかの「まとまり」であるような言い方をしたこともある（西阪, 2005a）。しかし、発言順番は、(Sacksらが丁寧に記述しているように) そのつど会話者自身が志向する最小限の単位から構成されているのに対し、反応機会場を完結点とするような「単位」「まとまり」があるようには思えない。むしろ、反応機会場という場所を1つの会話オブジェクトとして考えたいと思う。

機会

反応機会場で聞き手が実際に反応をすることは、必ずしも規範的に期待されてはいない。反応機会場は、あくまでも聞き手の反応の機会を用意する場である。だから、聞き手の反応が実際になかったとしても、（質問のあとに回答がなかったときのように）その反応の不在が「観察可能」になることはない。実際、#5には、聞き手の反応のない反応機会場がいくつかある。例えば、14行目の「んで」や16行目の「タクシーで:」の末尾に反応機会場がある。

#5

- 14 B: →=閉まっちゃうんですよ.. んで .h なんか
15 ぼく こないだ友だちが: 来たんで:: で

- 16 →あのタクシーで: >わざわざ< 行った
17 んですよ:.
18 C: タ(h)クシ[で]

14行目の「んで」のあと、Bは息継ぎ(.h)をしているため若干の間があく。にもかかわらず、聞き手は何の反応もしていない。16行目の「タクシーで:」という表現自体は、18行目でCによって拾い上げられるが、そのCの反応は、「タクシーで:」の末尾の反応機会場においてではなく、17行目の発言順番（構成単位）の完結点（「ですよ:」のあと）で産出されている。

電話の用件を切り出すことをマークする「あの」「あのね」などの末尾に反応機会場が用意されても、そこで反応のない場合もある。次の2つの断片はいずれも電話におけるやりとりの冒頭である。

#6 [MI #5]

((呼び出し音))

- 01 A: はい(も)し も::し,
02 C: .h は もしもし 明治学院大学のいけ谷と
03 申しますが:.
04 A: は[い::,
05 C: [.hh あの哲学の教科書のこと:::- を
06 貸している池[谷-
07 A: [あ, ああ[あああ], [みきこ?
08 C: [あ::ん] [.h
09 C: うん み[きこですけど]
10 A: [ああああ] ん[ん.
11 C: [.hh あの:::--
12 →あのね, 急にね, 哲学 なんか レポート書く
13 (.)とか言われちゃって:::
14 A: ああ ああ [ああ ああ ああ
15 C: [教科書が必要になっちゃったの:]

互いに相手を認識し合うためのやりとり (02-10行目)のあと、Cは「あのね」と言って用件を切り出している (12行目)。この「あのね」の末尾に反応機会場が用意されているけれど、

聞き手の反応はない。しかし、その反応の不在は、公的に気づかれることも、志向されることも、対処されることもない。

#7は、Aに電話が取り次がれたところから始まっている。Aが最初に電話に出てきたとき、何か口に入っているような声で「もひもひ」と言っている。Bは、公的な形でその声の異常に気づき、食事中だったか聞いている(03-04行目)。20行目でAは、その異常の(どう考えても本気ではないような)理由を明らかにする(「ポリデントのおかげで煎餅が食べれん」)。

#7 [TJG: 01]
 01 ((受話器を取る音))
 02 A: もひもひ:
 03 B: もしもし。な-もしかしてご飯食べてた:??
 04 (.)
 05 A: °ん ん:°.
 06 (0.2)
 07 B: そ(h)う(hh)じゃないの?
 08 B: hh .h h |
 | (2.9)
 09 (1.2) |
 10 B: あのさ:::(h)
 11 (0.6)
 12 A: °ん°
 13 B: も(h)- ¥もしもし:??
 14 A: °もひもひ(h)°
 15 B: な(h) どうしたの(h)
 16 B: {hhhhh/(1.2)}
 17 B: だいじょ'ぶ?
 18 B: hh:: |
 | (1.6)
 19 (0.4) |
 20 A: ポリデントのおかげで煎餅が食べ[れん
 21 B: [そっか::
 22 せんべい食ってたんか(hh). .h な(h)んだ(h):
 23 .hh なんだ- >な-ん-なにかと(h) ¥思ったよ
 24 =なんかほりほり¥ ゆって(hh)る(h)か(h)
 25 ら(hhh)< .hh ↑な- なんだ::: とか思- (1.0)
 26 →そうかそうか: .hh あれさ: あの高橋さんと
 27 こないだ会ってさ::

この長い引用のなかに反応機会場はいくつかある。が、とりあえず、用件の開始をマークする26行目の「あれさ:」だけを見ておこう(10行目にも用件の開始をマークする「あのさ:::」があるが、これについてはあとで立ち返る)。この「あれさ:」の末尾に反応機会場が用意されているが、やはり聞き手の反応はない。ここでも、その不在は、公的に気づかれ志向されることはない。

以上から次のように言ってよいだろう。反応機会場は、あくまでも反応の機会として与えられているのであって、反応が適切に、もしくはふさわしくなる場所ではない。聞き手は、その場所で反応をしてもよいし、しなくてもよい。

2. 反応機会場における反応不在の可視化

とはいえ、反応機会場(以下ROP)における反応の不在が可視化される場合もある。反応の不在が不在として公的に気づかれ志向され、そして対処されるのには、相互行為の展開にふさわしい合理的理由がある。際立った例を2つ見ていこう。

反応の追求

#8は、子どもに関するラジオ相談の一部である。番組のホストであるアナウンサー(A)が、電話のかけ手(C)に、相談の内容を尋ねたあと、かけ手である母親は、その2日前の日曜日の出来事について語っている。母親によれば、その日曜日は登校日だったけれど、野球部の部員は試合のため、学校に行かずに試合のほうに行った。

#8 [RC 94B1]
 01 C: そのスクーリングのほうに行かなくて: .hh や-
 02 あ:::野球部のほうに行ったんですね.=試合
 03 のほうに.

- 04 A: ええ
 05 C: で、待ち合わせしたところが: .hh あの:: 地域
 06 から、まあ:=出たことがない子どもですから:
 07 A: はい
 08 C: →.hh あの:: (.) 合流できなくて:,
 09 →(1.2)
 10 A: [°はい°
 11 C: [あの:: 待ち合わせしたところ
 12 で [ですな: ? [.hh
 13 A: → [ええ, ええ, [ええ °ええ°
 14 C: 合流できなくて: んで: あの: 独りでなんか まあ
 15 四方八方探したらしいんです:.
 16 A: はい.
 17 C: んで: 七時:: すごくらしい: まあ: あ- 挙句の
 18 果て帰ってきたっていうような状態で:

この引用のなかにもいくつか ROP が観察できる。例えば、01行目の「行かなくて:」の末尾、05行目の「待ち合わせしたところが:」の末尾に ROP がある。しかし、そこには聞き手の反応はない。一方、08行目の「合流できなくて:」の末尾にも ROP がある。ここでも聞き手は反応していないが、しかし、そこには1.2秒の沈黙が生じている。この沈黙のあと、アナウンサーは小さく「はい」と言っているが(10行目)、次の(11行目の)母親の発言と重なってしまっている。容易に気づくことができるように、この1.2秒の沈黙のあとの母親の発言は、その直前に述べたことの繰り返しになっている。しかも、まったく同じ表現(「待ち合わせしたところ」)を用いることで、それが繰り返しであることがわかるようデザインされている。

同じ表現を繰り返すことは、すなわち「すでに述べたことを繰り返すこと」をすることは、聞き手の側に聞き取りもしくは理解に関するトラブルがあることを、強く示唆するだろう。実際、母親の繰り返しが「繰り返し」として認識可能となる最も早い時点で、アナウンサーは、「ええ」を4度繰り返す(13行目)。つまり、非

常に強い形で反応を行なう。ここに明らかになるのは、08行目の ROP (「合流できなくて:」の末尾)における反応の不在が、会話者たちにより志向され対処されているという事実である。ROP における聞き手の反応の不在が、このように可視化され、聞き手の反応が話し手により追求されることもある。

すでに述べたように、すべての ROP において、話し手は聞き手の反応を求めているわけではない。08行目で、とくに聞き手の反応が求められる理由はあるのだろうか。それは、母親がいま自分の子どもの「問題」を語っていることと関係している。18行目で、「このような状態」という言い方をするとき、そこに1つの出来事の報告の終局がマークされる(にもかかわらず、そこではさらに順番が続くことが、同時に主張されているのだが)。高校1年生の男の子が夜の7時過ぎに帰ってきたという事実は、それだけでは「問題」にならないだろう。「問題」なのは次の点だ。登校日であったにもかかわらず、試合があったために登校せず、しかも、その試合にも結局行っていない。それでいて、帰ってきたのは夜である。朝から晩まで、学校にも試合にも行かないで何をしていたのか。

母親の一連の発言が(自分の子どもに関する)「問題」の提示であるためには、試合に行かなかったということが、はっきりと受け止められていなければならないだろう。もちろん、反応がなくても聞き手はちゃんと聞いていたかもしれない。が、それでも、まさにその場所、すなわち「合流でき」なかったことが語られた場所で、聞き手の反応を追及することは、十分合理的である。

聞き手のトラブルを示唆する反応の不在

ROP における反応の不在は、別のやり方でも公的に気づかれ志向され対処されることがあ

る。上に引用した#7の10行目で、Bは「あのさ:::(h)」と言って用件を切り出そうとしている。ふたたびその末尾にROPが用意されるのだが、そのあと0.6秒の沈黙が生じている。

#7 [TJG: 01]
 01 ((受話器を取る音))
 02 A: もひもひ:
 03 B: もしもし。な-もしかしてご飯食べて::?
 04 (.)
 05 A: °ん ん:°.
 06 (0.2)
 07 B: そ(h)う(hh)じゃないの?
 08 B: hh .h h |
 | (2.9)
 09 (1.2) |
 10 B: →あのさ:::(h)
 11 →(0.6)
 12 A: °ん°
 13 B: →も (h) - ♪もしもし:??
 14 A: °もひもひ(h)°
 15 B: な(h) どうしたの(h)

すでに述べたように、09行目までに、Aの発話産出上のトラブルが公的に可視化されている。たしかに、Aは、Bの食事中かという問に対して否定的に答えている。しかし、すでにトラブルが可視化されている以上、そのトラブルの理由説明がAにより与えられてしかるべき状況が成立している。07行目のBの質問は、単に05行目のAの返答の確認を求めているだけでなく、まさにAの理由説明を適切にしている。にもかかわらず、Aの側から何の返答もない(08-09行目)。Bは、いわば見切り発車的に、10行目で用件を切り出そうとする。

このような状況のなかで、ROPにおける反応の不在(もしくは十分遅延された弱い「ん」)は、聞き手の、会話への参加の用意に関する不確定性を強く示唆するだろう。実際に、13行目でBは再度Aに呼びかける。すなわち、会話

に参加する用意があるかの確認を求める。こうして、ここでも、ROPにおける聞き手の反応の不在が公的に可視的となっている。

反応産出の条件

どんなときに聞き手はROPにおいて反応するのだろうか。この間に一般的な形で答えることは、おそらくできない。しかし、次のことが、すでに示唆されている。聞き手の聞く態度・参加の用意を示すこと、これが適切となる相互行為的な環境においてROPが用意されるとき、聞き手は反応しがちであるように思える(「適切」の程度は様々でありうるが)。

例えば、#3の08行目の「てゆうかさ::」は、Bの落ち合う場所の質問(「アキバのどこだ」)のあと(しかも2.0秒の沈黙のあとに)産出されている。この「てゆうかさ::」は、これだけで、次に来るものが、質問のあとに来るべきもの(返答)ではないものが来ることを、示唆している。つまり、それは、質問の前提への挑戦を、いわば予示している。このとき、その予示された挑戦を受けるべきBは、その挑戦を聞く姿勢をとくに示してよいだろう。

電話の用件が切り出される場所も、そのような(聞く姿勢をとくに示すべき)環境である。電話は、かけ手の都合で一方的にかけられてくる。そのとき、電話をかけられた側は、自分がその電話の会話に参加する用意のあることを、とくに示してよいはずだ。一方、#6と#7(いずれも用件の開始をマークする「あのね」 「あれさ:」の末尾のROPで聞き手は反応しなかった)では、かけ手が用件に入るに先立って、すでに受け手の側における会話参加の用意に関してトラブルが解決されている。#6では、受け手は、最初かけ手のことを認識できなかった。かけ手は、「明治学院大学の池谷」という名乗りから、より特定の「哲学の教科書を貸して

いる池谷」という言い方に変更し、その名乗りの変更のあと初めて、受け手は相手の認識を主張している（07行目。実際には受け手の認識を主張しているだけではなく、「みきこ?」と相手の名乗りに含まれない名前を述べることで、自分がきちんと認識できていることを実演的に示している）。それだけでない。かけ手の新しい名乗り方は、すでに用件の核心（貸した哲学の教科書）を示唆するような構成になっている。#7では、すでに示したように、受け手の参加に関するトラブルが対処され解決されていた。つまり、いずれの場合も、受け手の参加の用意という電話の会話に関する一般問題が、（部分的に）解決されたあと、用件は開始されている。だから、用件が開始されるところで、聞く態度をあえて示さなくてもよいのかもしれない。

3. 文のなかの行為連鎖1: 話し手による連鎖の開始

#8では母親(C)は、会話において文を構築している途中で、いったん文構築を中断し、聞き手の反応を求めた。最終的に、母親は、「で、待ち合わせしたところが、地域から出たことがない子どもですから、合流できなくて、それで、独りで四方八方探したらしいのです」という文を産出する。2つのことを指摘しておこう。

傾聴表示

#8の11行目の「待ち合わせしたところ」から、13行目の、アナウンサーによる4つの「ええ」の産出を挟んで、14行目の「合流できなくて」までの部分は、ちょうど1つの文のなかに挟まれている。これは、文のなかに埋め込まれたやりとりのもう1つの例であるようにも見える。しかし、13行目のアナウンサーの反応は、たしかに非常に強調されたものであるにしても、

それでもそれは1つ十全な発言順番を構成しているとは言いがたいようにも思える。とくに、#3と#4におけるROPにおける聞き手の反応は、もとより発言順番が交代できる場所で産出されているわけではない。実際、聞き手自身も、発言順番を取ろうとしているわけでもなく、単に話し手が発言を先に進めていくことを促しているだけである。その意味でそれは、Emanuel Schegloff (1982) が「継続子」と呼ぶものに近い。ただ、継続子は、順番交代の可能な場所で、あえて順番を取るのを控えることをするのに用いられるオブジェクトである。それに対して、ROPはそもそも順番交代が可能な場所ではないので、そこでの反応を継続子と呼ぶことは適当ではない。ここでは「傾聴表示」ととりあえず呼んでおこう。傾聴表示が十全な順番を構成していない以上、厳密に言えば、11-14行目は行為連鎖を構成しているとも言えないかもしれない。

一方、ROPは、現在の発言順番が未完結であるにもかかわらず、順番交代が行なわれうる場所でもある。そのときには、まさに現在の発言順番が未完結であるがゆえに、そこで開始された行為連鎖が完結したあと、未完結のまま終了した順番に「戻っていくこと」が行なわれる。そのとき、「文のなかの行為連鎖」と呼ぶべき現象が生じる。4節で、そのような事例をいくつか引用しよう。

継続子

#8について述べるべきことが、もう1つ残っている。母親(C)は、件の繰り返しのあと、元の発言へと戻っている。そのとき、14行目における「んで:」は、その「戻ること」をマークしているように見える。このように中断した項目に「戻ること」をするという機能のことを「継続子」と呼んでおこう (cf. Jefferson, 1972)。

林が照準していた、「助詞」から発話を開始すること（すなわち、あえて発話を寄生的なものとしてデザインすること、あるいは「ゼロ記号+後置詞」）も、連続子の1つとみなしてよいだろう。「文のなかの行為連鎖」の場合、その行為連鎖が開始されるやり方・場所があると同時に、その完結後に、中断された発言を再開するやり方もある。

ROPにおける明確化の挿入

最初にもう1つ「文のなかの行為連鎖」の境界的事例を見ておこう。#9は、子どもが同じ小学校に通う3人の母親の会話である。「みちこ」とは、Cの娘の友だちで、Cの娘とともに受験のための塾に通っている。「みちこ」の話題はAが最初に持ち出した。Cは#9の冒頭(01-02行目)で、塾のテストでみちこがいい点をとったと語っている。BもCもAの友人だが、BとCは初対面である。

#9 [MT-3: 07]
 01 C: う:::ん でも みちこちゃん この前すごい
 02 よかったんだよ [テストの点数、
 03 A: [hh そうなの?
 04 C: →も 美樹がさ[::] [美樹ってうちの子なんです=
 05 A: [HH [hh ((咳き))
 06 C: =けど[::
 07 B: [°はい°
 08 C: ↑ま- み- みちこ すごいんだよ: とかって
 09 ゆって[:さ: 人の点数自慢してん[だ(h)よ(hh)
 10 A: [(°ほんど°) [ehehh hh
 11 B: [hhhhhhhhh

04行目でCは、みちこが「すごい」点数をとったことをどうやって知ったかを述べ始める。自分の娘から聞いた、と。このことを述べるにあたり、Aには、「美樹」と言えばCの娘であることがわかるとしても、Cと初対面のBには、そのような知識がそもそもないと予想できる。

であるならば、美樹が誰であるのかを、Bに説明してやることは、みちこに関する情報の源泉を語るという点において、決定的に重要である(美樹が自分の娘であれば、娘がその友だちのことを親に語るというのは、特別な理由説明なしに受け入れられることだろうから)。もちろん、04行目から始まる発話は、自分の娘が、同じ受験生でありながら、自分の点数ではなく、他人の点数を自慢している能天気さに関するものである。しかし、この新しい話題は、あくまでもみちこの点数に関するC自身の報告のあと、その根拠を語ることがふさわしい場所において、その場所に適合したやり方で導入されている。

04行目でCは、「美樹がさ::」と言ったあと、いわば文の途中に、「美樹」の解説を差し挟んでいる。実際、08行目で「みちこすごいんだよ:」とCが言うとき、この発言は、美樹が語ったことの引用として組み立てられている。つまり、それは、04行目の「美樹がさ::」に直接連なる発言としてデザインされている。言い換えれば、それは「美樹ってうちの子なんですけど::」を飛び越えて、「美樹がさ::」につながっている。

一方、4行目の「美樹がさ::」の末尾にはROPが用意されている。つまり、解説の挿入はROPにおいて開始されている。

Cの解説に対して、Bは小さな声で「はい」と応える。だから、Cの解説とBの応答で、1つの行為連鎖が構成されているようにも見える。だが、04-06行目の「美樹ってうちの子なんですけど::」の末尾は、発言順番の可能な完結点になっていない。そこには、ふたたびROPが用意され、むしろ、発話がまだ続くことが主張されている。であるならば、05行目のBの「はい」は、独立の1つの順番というよりは、傾聴表示であるかもしれない。そのかぎり、Cの解説とBの反応は、厳密な意味での

行為連鎖を構成しているわけではないとも言えよう。とはいえ、ROP において、文の内部にその文の一部でない何か（文の一部に関する解説など）が差し挟まれることがある。この点をまずは押えておこう。

ROP における行為連鎖の挿入

次の例は、ROP において、行為連鎖が開始される例である。B は麵屋土蔵の奥深さについて語ろうとしている。

- #10 [KB-3: 16]
- 01 B: ほくやっぱ麵屋土蔵の奥深さを知ったのは::
02 (0.6)
- 03 B: →「最後の:, つゆを:,」 ↑お-ご:- 本来 つ-
04 (C): [()]
- 05 B: あの: 麵つ- つけ麵のつゆって濃いじゃない
06 です [か:
07 C: [ん ん んん
08 B: あれって飲めないじゃないですか.=>てゆか<
09 あの [()]
- 10 C: [あれ [スープ足して]
11 A: [スープ (足して)] んん
12 (.)
- 13 C: いやそれは め- あの:: わりとつけ麵やって
14 くれるところは:: わりとやって [くれるよ
15 A: [くれる (ね)
16 B: .hhh「それで それ 飲んだときに: (0.8)
17 °やばい° (.) 癖になる
18 かも[(’って) [yahahahaha ha ha ha
19 C: [gha [huhuhuhuhu
20 A: [hahahahaha hhhhhh

03行目の「最後の:, つゆを:,」の末尾には ROP が用意されている。B はここで、自ら「最後のつゆ」に関する補足説明（つけ麵のつゆはそれだけでは濃くて飲めないという説明）を開始する。「最後のつゆを」は、消えてなくなるわけではなく、16行目で「それ」という指示表現により（スープを足してということも取り込みながら）復活させられ、「飲んだときに」へとつ

なげられていく。このとき、16行目の「それでそれ」は、中断した文の再開をマークする連続子にほかならない。

03行目の「つゆを:」のあと、#9と同様に、話し手自らが、補足説明を差し挟んでいる。が、その補足説明は、確認を求める形でなされており、最初に06行目の末尾で、次に08行目で、順番交代が行なわれてもよい場所が用意されている。07行目でCは、確認を与え（「ん ん んん」）、10行目では（Bが「てゆか」と言いながら自分の発言の修正を試みるのと重なりながら）CとAは、そこで求められた確認が与えられるならば話し手（B）が次に言うべきこと（つけ麵のつゆはそのままでは飲めないけれど、麵屋土蔵ではスープを足して飲めるようにしてくれるということ）を、先取って語る。このように、#10では、「文のなかの行為連鎖」が達成されている。

ただし、Cは、そのあとすぐ（13-14行目）、つゆをスープで割ってくれることは、麵屋土蔵だけではないこと、つまり、それは「麵屋土蔵の奥深さ」とは言えないことを主張する（このCの発言がBへの非同意であることは冒頭の「いや」によりマークされている）。もちろん、すぐにわかるように、これはCの誤解である。Bは、連続子を用いて途切れた文を再開することにより、この（誤解にもとづく）Cの発言を「連鎖上消去」（Jefferson, 1972）している。

次のやりとりにおいても、話し手（C）はROPにおいて、聞き手の一人（B）に事実関係に関する確認を求める。BとCはAに対して、明治軒でいかに多くの人が行列を作っているかを語っている。

- #11 [KB-3: 13]
- 01 C: で:: それで: それが: (1.0) に- ど-土曜
02 →「土田」じゃなくて, 水曜休みだよね: °あれ確か°.

03 B: nhhh もう (h) (☞そう [ですね☞])
 04 C: [土日:] がそうっていう
 05 のは当たり前なんだけど、へい日もそうなの。
 06 (1.2)
 07 B: だ- みんな本持って: 並ぶんですよ

02-03行目の「水曜休みだよね: あれ確か」「もうそうですね」という行為連鎖（確認を求めることと与えること）のあと、Bは04行目で、「土日」という、文が途切れる直前に産出されたのと同じ表現を繰り返すことで、元の文に戻ることを行なっている。ここでは、「土日」という表現が連続子となっている。

次のやりとり（#12）では、Bは「ボーイング」という芸能事務所で「カチコミ」があったときのことを語り始めている。02行目の「ボーイングの:」の末尾と03行目の「事務所に:」の末尾にROPが用意されている。後者のROPにおいて、聞き手であるAは傾聴表示を産出するが、それと同時に話し手（B）は、ボーイングの知識について聞き手（AとC）に確認を求める。

#12 [KB-3: 01]
 01 B: .hh んで あれらしいですよ=で すごい面白い話
 02 (す)けど- あの ボーイングの: .h あの:
 03 →事務所に:
 04 A: h [ん:
 05 B: [ボーイングってある [じゃないです [か::
 06 A: [hh ((咳払)) [°ん ん°
 07 B: あそこに カチコミが:: あったときに:
 08 A: んん

「ボーイングってあるじゃないですか::」に対してAは小さい声で「ん ん」と返事をしていく。たしかに、声は小さいが、Aははっきりとうなずいている。この確認連鎖のあと、Bは「あそこに」と言って、中断直前の「ボーイングの事務所に」を受けながら、中断された文を

再開している（「あそこに」が連続子として働いている）。

4. 文のなかの行為連鎖 2: 聞き手による連鎖の開始

ROPにおいて聞き手が行為連鎖を開始することも、しばしば観察される。いくつか例を挙げておこう。

修復の開始

#13は、#12の続きである（#12の07行目と#13の01行目が同じ）。01行目の末尾（「ときに:」の末尾）にROPが用意されている。そこで、Cは、「カチコミ」の意味を聞いている（「税務署?」04行目）。

#13 [KB-3: 01]
 01 B: →あそこにカチコミが:: あったときに:
 02 A: んん
 03 B: [もう-
 04 C: →[税務署?
 05 B: あ あの税務署じゃなくて、もう お- 怖い
 06 お兄さんが-
 07 C: ああ ああ [ああ ああ ああ.. ほんまもんかい。
 08 B: [ビストルで:::
 09 B: ん mhahahahahahahahaha, その, .hhh [ああ:
 10 A: [撃ち
 11 込まれたってこと?
 12 B: ああ ああ そうそう。あの: ガラスに 二発
 13 ぐらい割られてるんです [ね::
 14 A: [ん::ん
 15 B: じゅう- じゅう- に- あの 二発ぐらい.= [んで
 16 [そのとき] もう (.) [ちょうど-
 ((8行省略))
 17 B: [そしたら] なんか、あれらしいすね: もう、そん-
 18 [そのとき] ちょうどゴルフ行ってたらしいんです、

04行目でCにより開始された行為連鎖（理解候補の提示 [「税務署?」]、その拒絶と明確化 [「じゃなくて、怖いお兄さんが」]、その受け入

れ [「ああ」「ほんまもんかい」] のあと、こんどは A がふたたび修復を開始する (10-11行目)。B が A の理解候補を受け入れ (「そうそう」)、それを敷衍した (二発撃たれてガラスが割れた) あと、16行目で B は「そのとき」という指示表現により、中断時点 (「あったとき」01行目) を引き継ぎながら、中断された発言を再開しようとする。実際には、その後、中断された発言の継続ではないやりとりがもう 1 つ挟み込まれることになるが、17行目で最終的に、元の発言に戻ることが成し遂げられる (16行目では途切れてしまった「ちょうど」という表現が、18行目でも用いられている点に注意)。

知識の主張

次のやりとりで A と C は、共通の友だちからの誘いを 2 人とも断らなければならない理由を述べあっている。C は、その日に姉の職場で有名作家のサイン会があるので、姉にそこに行くよう強く誘われていることを述べている。08-09行目で C は、姉の職場 (西北百貨店) にその作家が来ると伝える。09行目の末尾に ROP が用意される。

#14 [MK #1]

- 01 C: うちなんかさ:::(h), お姉ちゃんのね::,
 02 A: う::ん.
 03 C: あの:::, 働いている [西北百貨店にね::,
 04 A: うん, うん.
 05 (0.6)
 06 C: なんか::,
 07 A: (妙な問だ(hh) [な(hhh)])
 08 C: [な(h)ん(h)か::, し-((有名作家
 09 →の名前)) が [来る] とかなんとかいう話でね::
 10 A: ↑あ::,
 11 C: [そう::.
 12 A: [↑なんかさ, 西北に- のさ::,
 13 C: そう, そう, そ[う.
 14 A: [大江戸ブックセンター
 15 が() る ん で し ょ う ?

- 16 C: [あ(h), そ(h)う, そ(h)う, そ(h)う.
 17 そ(h)う,そ(h)う,そ(h)う,そ(h)う,そ(h)う.
 18 A: こんでさ::あ, なんだっけ, サイン本とか
 19 いっぱいさ::[:::,
 20 C: [うん, うん, うん.
 21 A: オープン記念限定で::[:
 22 C: [う::ん.
 23 A: サイン本を,(.)いっばい売り出すからチャンス
 24 とかって ((雑誌名)) とかに書いて [あつ(た.)
 25 C: [書(h)いて
 26 あった?(hhh) .hh [で, 来る] らしくてさ:::,
 27 お姉ちゃんが:::, 来い, 来い, 来い,
 28 来いって::言うから:::, (0.4) じゃあ それに
 29 行こうかな: とか(h)思(h)って(h).

09行目末尾の ROP において、聞き手 (A) は、「あ」と叫びながら思い出したことをし、そのあと、自分もそれを某雑誌で読んだことを告げる。25-26行目で、C は A の「書いてあった」を繰り返すことで、A の知識の主張を受け止め、ついで、「で」という継続を表わす接続詞によって、中断された発言を再開する。そして、中断直前の「来る」という表現を用いることで、元の発言に戻ることをしている。

気づくことをすること

次のやりとりでは、T は、自分の苗字がいかに珍しいかということを描くために、その苗字を持つ世帯が北海道には 1 軒だけ、東京にも 2 軒しかないことを持ち出す。最初に、北海道に 1 軒しかないことを述べられたところで、ROP が用意される (15行目)。

#15 [SFD 03:18-04:41]

- 01 T: ただぼくの:::名字がちよっと変わって
 02 いる [ので:
 03 H: [ええ, ええ, ええ, [ええ
 04 A: [そうだよね:::
 05 T: [タカモリのモリ
 06 っていう字が [マモリになるんですよ.
 07 H: [は:::

- 08 A: ふ:ん.
 10 T: それは[::]
 11 H: [ふつうは: あの 森林のシン[ですよね:
 12 T: [そうなんで
 13 すよ、あの::(:)ですから h- [北 海 道]で=
 14 H: [だけどこれは-]
 15 T: →=:ほくのところ一軒しかなくて::
 16 H: あ:, 北↑海↓道.
 17 T: そうなんです.
 18 H: °は:::ん°.
 19 T: [で, 東京::でも:二軒].
 20 A: ふ:::↑ん [(.) ほんと:

この会話には3名の男が参加している。そのうち、AはTもHもよく知っているが、TとHはほとんど初対面である。12-15行目で、Tがあえて北海道に言及し、そこに「ほくのところ」があると言うとき、Hは、そこで初めて、Tの出身地が北海道であること、このことに気づいてよいはずである。あるいは、Tの発話自体がそのように仕組みられていると言ってもよい。実際、そのROPにおいてHは、Tが北海道出身であることに気づくことをする（「あ:北海道」と、12-15行目のTの発言から「北海道」だけを拾い上げているが、それは、Tの出身地に気づいたことをする最も簡便なやり方である）。この「気づき」は、同時に確認の求めにもなっている。17行目でTは確認を与え、その確認を18行目でHが受け止める。そのあと（19行目で）Tは、中断された文を「で」と言って再開する。さらに「地名+で」（もしくは「地名+で+X軒」という中断直前のフォーマットを繰り返すことで、元の発言に戻ることをする。

5. 結論：反応機会場の相互行為的意味

「文のなかの行為連鎖」の相互行為的意味について、少し考察を加えておこう。##12、14、15については、別のところ（西阪、2005a、

2005c）で詳しく論じたことがある。そこで述べたことは、いまは繰り返さない。ここでは2つのことだけ、簡単に触れておきたい。一つは、近接性の管理についてであり、もう一つは、質問の意味の相互行為的達成についてである。

近接性の管理

例えば、#9で、「美樹」が自分の娘であることを述べるのに、なぜわざわざ1つの文の間に、その補足説明を割り込ませなければならなかったのか。いくつか論点があるだろう。第一に、いま「わざわざ」と述べた。教科書文法の規範にのっとって眺めるならば、かの補足説明は、たしかに「わざわざ」挿入されているように見える。しかし、私が主張したいのは、むしろ、実際の相互行為のなかで産出される実際の「文」には、必要な補足説明を、いわば「自然に」差し挟むことのできる場所が、体系的に用意されている、ということである。

第二に、このような場所（すなわちROP）が用意されていることには、相互行為的な意味がある。#9でCが「美樹」の補足説明をする場所は他にもありえた。つまり、「美樹が、みちこってすごいんだよ、とかいって、人の点数、自慢してんだよ」という文の前もしくは後である。しかし、このCの発言が会話の展開におけるこの場所で何を行なっているかに注目しておこう。#9として引用したやりとりの前から、みちこのことが話題になっていた。Cはみちこの点数に言及する（01-02行目）。件の発話（04-09行目）は、このみちこの点数の情報源について語りながら、自分の娘の能天気さを報告するものになっている。だから、もし補足説明がこの文の前に置かれるならば、この話題上のつながりに断絶が生じるだろう。一方、Cのこの発話（04-09行目）は、自分の娘がいかにか能天気であるかについて、いわばおそらくAもBも

まだ知らない新たな、しかも語るに値する面白いこととして報告している。その意味で、この発話は、「面白いことの報告-その評価」という行為連鎖を開始している。だから、もしかの補足説明がこの発話の後に置かれるならば、1つの行為連鎖の2つの成分の近接性が破られることになるだろう。それに対して、補足説明を文の途中に挿入することは、その文自体の、前後のやりとりとの（近接的）つながりを維持しつつ、必要な説明を加えることにはかならない。#10の場合も同じである。「ほくやっぱ麵屋土蔵の奥深さを知ったのは、最後のつゆを飲んだとき、やばい、癖になるかもって」という（擬似文的な）発言は、先立つやりとりと（麵屋土蔵という）話題の上のつながりを持っているし、ふたたび「面白いことの報告-その評価」という行為連鎖を開始している。

また、同じことは、ROP において聞き手が行為連鎖を開始する場合についても言えるだろう。#15でTの「ですから、北海道でも一軒しかなくて、東京でも二軒」という発言は、先立つやりとりとは、苗字という話題の上でのつながりを持ち、同時に、「ニュースの報告-その評価」という行為連鎖を開始している。

質問の意味の相互行為的達成

質問の意味は、質問とともにあり、聞き手はその意味を捉えて返答を行なう、こう私たちは考えがちである。しかし、実際には、質問の意味は、しばしば返答のなかで確定される。#4におけるAの「麵屋土蔵ってどこにあるの」という質問（19行目）について一言述べておこう。直前のBの発言は、友だちが来たとき、「タクシーでわざわざ」麵屋土蔵に行ったと述べる。そのあとCが、「タクシーで」という表現を笑いながら（つまり通常ではないこととして）拾い上げることにより、「タクシーでわざ

わざ」行くということが焦点化される。Aの質問は、このような会話の展開上の位置に適合した形で導入される。それに対するBの答えは、（この会話が行なわれている）Bの家の最寄駅の「西口」の、某大学のそばにあるというものである。これは場所に関する間に対する返答としては、完結したものでありうる。しかし、返答の可能な完結点（21行目の末尾）は、発言順番の可能な完結点になっておらず、そこにはROPが用意される。そして質問者であるAはそこにおいて傾聴表示を産出する。もちろん、麵屋土蔵の場所を述べていくにあたり、聞き手に合わせて必要な補足をしていく用意のあること、このことが（返答者による）ROPの産出において示されている、と言うこともできよう。しかし実際に質問者の傾聴表示のあと返答者によって産出されるのは、麵屋土蔵の場所の明確化・特定化ではなく、麵屋土蔵とはどういう店かということの説明である。

このような展開は、決して荒唐無稽なものではない。それは、Aの「麵屋土蔵ってどこにあるの」という質問に、半ばすでに仕組まれている。この質問は、形式上は場所を問うている。一方、店の場合、その店についての知識は層化されている。ある店の名前を出されたとき、その店に行ったことがあれば、その店が実際にどうだったかを語るができる。行ったことがなければ、成立ちなど一般に知られていることを語ることもできるかもしれない。何も知らなくても場所だけは知っているかもしれない。つまり、場所の知識は、店の知識としては最低の知識であり、それさえも知らないということは、それがどういう店であるかも知らない可能性が高い。だから、場所の間は、同時にその店がどういふ店であるかの間でもありうる（実際、Aは質問のなかで「麵屋土蔵って」という言い方をすることで、麵屋土蔵に馴染みがないことを

マークしている)。そうであるならば、第一に、返答者 (B) は、質問に合わせて適切にデザインされた返答の可能な完結点において、(単に場所の説明の拡張のみならず) 店そのもの説明へと返答を敷衍していく用意のあることを、(ROP を作ることで) 示してよいだろう。第二に、A が傾聴表示のみを産出するならば (つまり、そこまでの返答を返答として受け止めることをしないだけでなく、さらに聞く姿勢を示すならば)、B は、形式上の質問への返答から、そこに含意される質問の返答へと移動してよいはずである。このように、一方で返答が、相手 (質問者) の出方に応じて、いわば質問者と返答者の協同により達成される。他方、それとともに、質問の意味も、返答者と質問者の協同の達成にほかならない。

未完結の発言順番

これまで見てきたことは、発言順番が未完結のまま順番交代が起こる可能性である。もちろん、未完結の順番は、そのまま結局完結されないこともある。しかし、未完結の順番のあと、しばしば、中断した地点に「戻ること」が成し遂げられる。ROP は次のような場所と言ってもよいかもしれない。すなわち、あとで戻れることを、適切な・ふさわしいこととして維持したまま、いくつかの (限定的な) 行為連鎖の開始を許すような、そういう場所である、と。

【参考文献】

- Hayashi, M. (2004). Discourse within a sentence: An exploration of postpositions in Japanese as an interactional resource. *Language in Society*, 33: 343-376.
- 林 誠 (2005). 「文」内におけるインターアクション: 日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって. 串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』ひつじ書房.

- Jefferson, G. (1972). Side sequences. In D. Sudnow, ed. *Studies in social interaction*. New York: Free Press, pp. 294-338.
- Lerner, G. H. (2004). On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction: Grammar as action in prompting a speaker to elaborate. *Research on Language and Social Interaction*, 37(2): 151-184.
- Morita, E. (2005). *Negotiation of Contingent Talk: The Japanese Interactional Particles Ne And Sa*. Amsterdam: John Benjamins.
- 西阪 仰 (2005a). 分散する文. 『言語』34(4): 40-44.
- 西阪 仰 (2005b). 語句の配置と行為の連鎖: プラクティスとしての文法. 片桐恭弘・片岡邦芳編『講座 社会言語科学 第6巻 社会・行動システム』ひつじ書房, pp. 176-201.
- 西阪 仰 (2005c). 複数の発言順番にまたがる文の構築. 串田秀也・定延利之・伝康晴編『文と発話 第1巻 活動としての文と発話』ひつじ書房.
- Sacks, H., E. A. Schegloff & G. Jefferson (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4): 696-735
- Schegloff, E. A. (1982). Discourse as an interactional achievement: some uses of “uh huh” and other things that come between sentences. In D. Tannen, ed. *Analyzing discourse: Text and talk*. (Georgetown University Roundtable on Languages and Linguistics). Washington, D. C.: Georgetown University Press, pp. 71-93.